

【展示報告】

大学史特集展示「俺たちの「ザキ」

——横専生・神大生と伊勢佐木町——について

大坪潤子

はじめに

大学資料編纂室が所蔵する神奈川大学の前身・横浜専門学校の卒業記念アルバムや個人の写真アルバムには、しばしば伊勢佐木町の通りやそこで青春を謳歌する学生たちの姿がある。

「ザキ」と通称される横浜の伊勢佐木町は、関内駅の北口近くから吉田橋を渡り西南方向へ伸びた一画の町名、また、そこを貫く繁華街の一帯である。横浜専門学校生はここに買い物や娯楽などのために通い、卒業や出征に際しては、ここでの思い出を記録に留めていた。横浜専門学校での日々と「ザキ」は、切り離せないものであった。また戦後、接収解除となった伊勢佐木町には、神奈川大学生の姿があった。

二〇一六（平成二十八）年度の大学史特集展示は、

これら本学学生と伊勢佐木町との関わりをテーマとし、編纂室所蔵資料を用いて構成して、十月一日（土）から十二月二十四日（土）まで開催した。本稿では、展示概要と共にその関係を改めて俯瞰する。

本展示では、横浜キャンパス三号館展示ホール内にある大学史展示部分の一角に日本常民文化研究所から借用した視き型の展示ケース二台を設置、実物資料を中心に展示すると共に、その背後の壁面に、六角橋から伊勢佐木町までの交通経路や展示で登場する店舗等の位置を示した「伊勢佐木町 横専・神大関連マップ」と年表〔表1〕を掲示した。また展示ホールの外、三号館吹抜側の可動壁面に、卒業アルバムなどから製作したA1サイズの写真パネル十枚を掲示した〔表2・展示資料一覧参照〕。パネルの合間には、写真

パネルにおさめられた場所の現況写真を可能な限り同じ位置・角度で撮影して配置し、また、その場所や事象に関わる卒業生らの言葉を小さなプレートに記してちりばめた。この言葉は学内の新聞や雑誌へ当時掲載された文章や日記、そして卒業後の回顧談などから引用したもので、会期中も新たに見つけたものについては随時追加していった。¹⁾

一、ハマのザキ

「伊勢佐木町」は、横浜・関内地区の大部分が焼失した一八六六（慶応二）年の大火の後、一八七四（明治七）年に、関内から吉田橋を隔てた関外地区が興行地として開発される過程でその一面に誕生している。その後、芝居や寄席を中心とした盛り場として発展し、一八九九（明治三十二）年の大火や一九二三（大正十二）年の関東大震災で壊滅的な被害を受けるがその度に復興を遂げ、デパートや映画館、カフェなどの集まる繁華街としてさらに賑わいを増していった。

一方、一九二八（昭和三）年に現在の地下鉄高島町駅近くで横浜学院として始まった本学は、境之谷（中区西戸部町）への移転後まもなく横浜専門学校（以

下、横専）となり、一九三〇（昭和五）年に現在の六角橋（神奈川区）の地へ移転した。展示で扱ったのは、この六角橋時代からである。

横専で発行されていた新聞『横専学報』では一九三三（昭和八）年、伊勢佐木町について次のように述べられていた。

銀座と浅草と新宿をつき混ぜたのが伊勢佐木町だ。四つのデパート、無数の映画館、寄席、劇場がある。あらゆる娯楽と食欲と流行とがこゝで渦を巻いてゐる。外国映画の封切を観たいものはオデオン座がある。「博雅」のシユマイと支那料理を食べに、東京からわざわざ出かけて来る。

（「伊勢佐木町」『横専学報』第十九号

一九三三年一月）

ここで記される「四つのデパート」とは、①一丁目の野澤屋（のち松坂屋）、②吉田橋際の松屋横浜支店（旧鶴屋呉服店）、③閉店した越前屋が一九三二（昭和七）年十二月に再建させたばかりの、不二家の向かいの山越本店（のち寿百貨店）、④一九二九（昭和四）

年に開店した四丁目の相模屋本店（一九三四年閉店）、と考えられる。映画館はオデロン座⁽³⁾、横浜電気館、喜楽座等、寄席は大正期に吉本興業が開いた花月があった⁽⁴⁾。劇場はこの時点でもどこが営業していたのか、現時点で特定できない。関東大震災以前は寄席や芝居が伊勢佐木町の娯楽の中心であったが、震災後は映画にとつて代わっていた。中でもオデロン座は一九一（明治四十四）年の開館以来、洋画封切り館として著名な、伊勢佐木町を代表する映画館であった。中華料理の「博雅」は、一丁目の関内寄り入口近くにあり、そこで店頭販売される焼売は伊勢佐木町の名物であった。

また、一九三六（昭和十一）年入学の横専生が所有していた小冊子『横浜案内』（「展示資料1」）では、野毛山公園や三溪園、金沢文庫などの行楽地や景勝地、社寺に続き、伊勢佐木町が「浜の歓楽街」の筆頭に挙げられている。

このように、伊勢佐木町——「ザキ」は、まさに横浜——「ハマ」随一の繁華街であった。その存在は、地元外からの入学も多かった横専生たちにとって、眩しく刺激的なものだったことだろう。

二、横専生とザキ

次に、横専と「ザキ」へのアクセスを考えてみよう。六角橋の学校から伊勢佐木町へは、徒歩では一時間余りと気軽に行ける距離ではない。しかし市電（路面電車）の終点・始点であった六角橋の電停から市電を用いれば、馬車道の電停で下車後数分で伊勢佐木町へ入ることができた⁽⁵⁾。また、松屋と野澤屋の両百貨店は、一九二八（昭和三）年から無料送迎バスを横浜駅東口（桜木町）各店舗で運行しており、これに乗り込む学帽・制服姿の横専生の写真が残されている（「図1、展示資料29」）。

なお、一九三七（昭和十二）年に横専へ入学した上羽勝夫氏によると、在学時は「六角橋から馬車道までの電車賃が七銭。五人で帰りのタクシーを拾えば確か三十銭ぐらいで乗せてもらった」という。ちなみに同氏によれば当時「喫茶店でのコーヒー代が一杯五銭、高い所で十銭」であった⁽⁷⁾。

横専が六角橋の地に移ってから、学校前の坂や坂下の通り、また東急東横線白楽駅にかけての六角橋の商店街に食堂・理髪店・文具店・書店・ティーラーなどの

店舗は漸次開店した。⁽⁸⁾横専生の日常的な買い物・用事はそこで事足りたかと思われるが、それに対して「ザキ」は一步足を延ばして、その空気に身をおいて一息つき、あるいは少し羽目を外す場所、といったところであろうか。

歓楽街、といっても専門学校生が日々豪遊するわけもなく、横専生のザキでの主な娯楽は映画鑑賞であった。当時の『横専学報』には学生による熱い映画評が掲載されたほか、一九三六（昭和十一）年六月には学内で『映画展望』誌が創刊されている。なお創刊にあたり同誌に祝辞を寄せている宝塚劇場（一九三五年開館）は、現在の関内ホールの位置（馬車道）にあった大規模な劇場・映画館である。町名としては伊勢佐木町には入らないが、横専生にとってはここも広く「ザキ」のエリアとして捉えられていたようで、個人の写真アルバムなどにも伊勢佐木町の一角として登場する。

一九三八（昭和十三）年、横浜専門学校広告研究会の『新広告研究』二号〔展示資料5〕には、「学生の見た伊勢佐木町」と題した一文があり、次のように導入されている。

伊勢佐木町の名が既に我々になつかしい響と耳ざわりとを持つものである。我々の外出先の八割までは此の伊勢佐木町である。と言ふも過言では無いと思ふ。我々の消費生活の一部が此処で行はれてゐるのであるが多くの場合漫然と歩き漫然と意識してゐるに過ぎぬ。此の機会にザキを再認識し判然と之を把握する事は満更無意義でも無からう。

（原田三郎「学生の見た伊勢佐木町」『新広告研究』
第二号、一九三八年一月）

同誌では概ね、店の種類や広告看板などに不足・不満もあり、銀座と比較するなどして一層の発展を望みたいといった論調であるが、それだけよくザキを歩いていることが窺える。

そして、同研究会に所属した貿易科（一九四〇年卒）の竹本豊秋氏は、伊勢佐木町の喫茶店の常連であっただけでなく店のマッチラベルのデザインも手がけていたという。⁽⁹⁾後に同窓生から寄贈された竹本氏のスクラップブック〔展示資料10、口絵〕には、洋菓子や中華料理の不二家や喫茶店のU.S.やモナミ、焼

売の博雅など、ザキを彩った様々な店のマッチラベルが貼付けられている。横専生とザキの意外な関わりを知る資料である。

学校行事や課外活動の中でも、伊勢佐木町は欠かせない存在であった。戦前の創立記念祭では横専生らの仮装パレードが行われていたが、このパレードは、横専・神大と伊勢佐木町との関わりにおいて、社会情勢を如実に反映するものでもあった。次に挙げるのは一九三二（昭和七）年五月十五日に行われた仮装パレードの記憶である。

仮装パレードは校名入りの高張提燈や校旗、応援旗を先頭に押し立て（中略）若かりし学監米田現学長も堂々の行進の先鋒に立たれた（中略）当時は六角橋即ち校門から伊勢佐木町迄往復徒歩で行進したもので（中略）このパレードの最大の想出として残るものは野毛から黄金町のガード下を左折して、愈々繁華街の中心伊勢佐木町に繰り込むべく、川風に吹かれて一息入れ隊伍を整えているときであった。けたたましい鈴の音と共に「号

外々々」の叫び声が、かの五・一五事件の突発ニュースを伝えたのである。一同愕然となり、直ちに先生方や配属将校の協議となり鶴の一声で「この非常事態に際しのおんびり仮装行列でもあるまい、依って行進は速かに伊勢佐木町を経由して帰校せよ」との伝令で、後は肅々として歩を進め帰校を急いだものであった

（一九三五年二部法学科卒 小川正夫「大学祭の今昔」『宮陵会報』第六号、一九六三年一月）

また、近くの横浜公園球場での対Y専（横浜市立横浜商業専門学校）の野球定期戦にあたっては、両校の応援団が長い列を作って伊勢佐木町を行進し、ハマの名物となっていた（図3、展示資料25・26）。

しかし一九三七（昭和十二）年には日中戦争が始まり、戦時体制の強化に伴い、ザキにも横専生にもその影響が強くみられるようになっていく。

一九三八（昭和十三）年六月、横専生も利用した百貨店の無料送迎車は、ガソリン節約のため廃止となった^①。そして一九四〇（昭和十五）年八月、国民奢侈生活抑制方策要綱により「享楽の飲食店」や映画館、百

貨店などの営業や利用が規制された。洋画の封切館として知られたオデヲン座も、松竹の経営下で国策に沿った邦画を上映し、一九四二（昭和十七）年には東亜劇場と改称した。百貨店の野澤屋も、施設の提供や販売制限によって通常の営業ができない状態であった。¹²

学校創立日や野球の勝利を祝って横専生がザキを進行することもなくなり、かわりに、戦果を祝しての行進がおこなわれるようになった〔図4、展示資料30〕。やがて一九四三（昭和十八）年に学徒出陣が始まると、横専としての壮行会は学校で開かれたが、親しい仲間を送る私的な壮行会がザキでおこなわれることもあった〔展示資料31、図2〕。図2は、横専の独逸語班による壮行会での写真で、横専として初の学徒出陣壮行会が開催された一九四三（昭和十八）年十一月の前月、伊勢佐木町の不二家（の中の中華料理店）を会場としている。¹³ 仲間内での壮行会とあってか、写真からはくだけた雰囲気も見てとれるが、裏書に「送る身はやがて行く身ぞ」とあり、出征が身近に現実味をもつて捉えられていることが伝わる。物資は統制されているものの、ザキでの壮行会は、学校でのそれとは

大きく違う思いを出席各人に与えたことだろう。学生生活との異常な形での決別は、ザキと対極にある世界への一歩でもあった。

卒業してから徴兵が決まった者にとっても、ザキは切なく思い返される場所であった。横専で野球班（部）に所属していた歌崎治美氏は、修業年限の臨時短縮措置により一九四一（昭和十六）年の十二月に卒業した。その後大阪での就職が決まっていたものの、徴兵検査の結果合格となり入隊することとなった。¹⁴ 次に示すのは入隊先の決定通知を待つ間、郷里の神戸から野球班の後輩へ送った手紙〔展示資料11〕の一部である。

〔前略〕

佐木の方を相変らず張切つてゐられる事と思ひます。

もう一度歩るいて見度いよ。

又其の内一度、横浜に行くやも知れぬ。少し要事が出来たら　でも今の所は全然未定なのですが　チャンスが出来れば直ぐ行つて見る積りだ。

佐木の空気は人並以上に味わつた自分だつたからね。

では、彼処此処の彼女連中に会つたらよろしく
我輩千人針は望まぬ主義だがどうも破れ相だ。ハ
ア…… 全じ作るのなら横浜の知つて

ゐる彼女達にも頼むかな ハア……
では本日は之れにて失礼致します。

野球部諸氏によろしく 大石君に呉々も一生懸命
にやる様伝えて下さい。

寒さの折 貴兄様も充分御身体を御大切に
西の空より貴兄の面影を映じつつ筆を濁く

治美

(一九四二(昭和十七)年一月十日付

歌崎治美発森島輝雄宛書簡より)

入隊を前に郷里で懐かしむ「ザキ」は、単なる学生
生活の思い出に留まらない彩りをもつものであったろ
う。その後の歌崎氏の消息は不明である。

三、神大生とザキ

一九四五(昭和二十)年八月の終戦を迎えても、伊
勢佐木町の賑わいは容易には戻らなかった。物資統制

に加え、伊勢佐木町の主な建物は横浜市内でもとりわ
け長く占領軍(米軍第八軍)の接収が続いたのである。

戦時中に「東亜劇場」となっていた旧オデヨン座の
建物は、占領軍用の映画館「オクタゴン・シアター」
とされた(一九五五年接収解除)。百貨店の野澤屋は
一階が占領軍のメイン・ストア(PX)として使われ
(一九五五年全館接収解除)、松屋は軍の中央病院に
(一九五五年解除)、不二家は将校のクラブになってい
た(一九五九年解除)。街自体も日本人の立ち入りが
制限されたため、代わりに衣食住や娯楽を提供する場
として野毛の闇市が隆盛を極めたという⁽¹⁵⁾。

一方、横浜専門学校は、終戦直後の一九四五(昭和
二十)年九月に校舎が接収されるが、三か月後に解除
となっている。そして一九四九(昭和二十四)年四月
に新制大学への昇格を果たし、「神奈川大学」として
新たなスタートをきった。

また横浜市内では、同年三月から野毛と反町を会場
に日本貿易博覧会が開催され、戦後復興を内外に印象
づけていた。しかし横浜随一の繁華街であった伊勢佐
木町は、先述のとおり、主な建物の接収が続いていた
のだった。

この時代の神奈川大学生——神大生とザキとの関わりを示す資料は残念ながら数少ない。前述のように実際に利用に制限があったことから、ザキに足を運ぶ学生も戦前に比べて格段に減っていただろうと考えられる。

今回の展示では、近年卒業生から寄贈された資料群によって、戦後、昭和三十年代の神大生とザキとの関わり的一端を示した。

一九五八（昭和三十三年）年に神奈川大学法経学部経済学科に入学した柏倉幸男氏は、在学中の四年間、松屋横浜支店で断続的にアルバイトをした。一九五三（昭和二十八年）年に接収が解除されていた松屋からは、中元や歳末の繁忙期に大学へアルバイト募集の案内があり、柏倉氏は初めそれに応じ、やがて繁忙期には松屋から直接打診（葉書）が来るようになったという。アルバイト中「実習生」として神大の仲間と学生服姿で売り場に立った柏倉氏は、当時のバッジや給料袋・大入り袋、通勤証明書などを丁寧に保存しており、それらを大学資料編纂室にご寄贈いただいた（展示資料12（23））。戦後の神奈川大学——神大とザキとの関わり的一端を示す、希少な資料である。この頃の松屋は

営業成績も好調で、ザキにはまた人の流れが生まれていた。柏倉氏の日記にも、入学間もないころ文房具を買いに伊勢佐木町の有隣堂へ行ったメモがある。また戦時中から接収下の長い中断を経て、一九六二（昭和三十一年）には神奈川大学として伊勢佐木町での初のパレードもおこなわれた。^①

しかし一方で、砂利置き場だった横浜駅西口の開発が始まり、一九五九（昭和三十四）年には高島屋が開店、一九六四年にはダイヤモンド地下街がオープンする。消費者の流れに変化がおきていった。やがて、六角橋から伊勢佐木町近くへの便利な交通手段であった市電は一九七二（昭和四十七）年三月に全廃され、大学からザキへのアクセスは、以前に比べれば随分不便なものとなってしまふ。卒業アルバムには、横浜駅やみなとみらい地区が目立つようになっていった。

おわりに

戦前の「ザキ」と横専生の濃密な関係の背景には、関東大震災からの復興や交通網の発達、昭和モダニズム文化の醸成といった条件があったと考えられるが、戦後もまた、接収や西口開発、交通網の変化といった

大きな社会的条件によって、神大とザキの関係は変容していったのではないだろうか。そして現在、横浜駅や関内駅周辺の整備・再開発をはじめ、横浜中心部では人の流れの変化が予想される動きがある。これらを受けて今後、神大とザキにはどのような関係が構築されていくだろう。

会期中の十月九日に開催されたホームカミングデーでは、新旧の卒業生が展示資料を前に語りあう姿も見られた。実際にザキ通いをしたという卒業生は多くなかったものの、「銀ブラみたいなものかな」「相当賑わっていたのね」など、当時のザキのイメージを各々でめくらせているようであった。

伊勢佐木町には戦前の建物も複数現存し、注意深く見て歩けば、横専時代の街の様子を思い浮かべることができる。ぜひ当時を想像しつつザキを歩いてみてほしい。

最後に、貴重な資料や情報を提供いただいた本学卒業生や、聞き取りに応じて下さった伊勢佐木町の各店舗、関係各位に改めて御礼申し上げます。

参考文献

- 1・山口辰男『横浜三街物語 ―モトマチ いせざき 西口』有隣堂、一九八二年十二月
- 2・宇野雄介「伊勢佐木町」「宮陵」第三十三号、神奈川大学同窓会、一九八四年三月
- 3・「伊勢佐木町一、二丁目」の街並（昭和10年ごろ）『とうよこ沿線』縦 No.31 一九八五年十二月
- 4・『講演会記録冊子』松信泰輔（講演「占領下の10年・伊勢佐木町界限―横浜再生への原点―」）『横浜学』を考える会公開講演会、一九八六年五月十七日開催
- 5・横浜市総務局市史編集室『横浜市史Ⅱ 資料編Ⅰ 連合軍の横浜占領』横浜市、一九八九年四月
- 6・同右『横浜市史Ⅱ 第一巻（下）』横浜市、一九九六年三月
- 7・「座談会 野澤屋と伊勢佐木町（1）（2）（3）」『有隣』第四九一号、有隣堂、二〇〇八年十月
- 8・〔展示図録〕横浜市発展記念館・横浜開港資料館編『シネマ・シティー―横浜と映画―』横浜市発展記念館、二〇〇五年一月
- 9・〔展示図録〕横浜市発展記念館編『モダン横浜案内』横浜都市発展記念館、二〇一〇年九月
- 10・〔展示図録〕横浜開港資料館編『ときめきのイセザキ140年 ―盛り場からみる横浜庶民文化』横浜開港資料館、二〇一〇年十月

年	横浜専門学校・神奈川大学	伊勢佐木町	横浜・社会一般
1874（明治7）		横浜・関外地区の興行地としての開発過程で「伊勢佐木町」成立 11月 野澤屋呉服店（のちの松坂屋）、伊勢佐木町支店開店 12月 第四有隣堂（現 有隣堂）、開店	
1911（明治44）		日本初の洋画専門館、オデオン座開館	
1915（大正4）		横浜初の劇場、羽衣座全焼、廃座	
1923（大正12）		9月 関東大震災発生、伊勢佐木町は壊滅的被害	
1924（大正13）		1月 森永キャンデーストア、吉田町寄りの伊勢佐木町入口に開店 3月 鶴屋（のちの松屋）石川町地蔵坂下から吉田橋際へ移転開業	
1927（昭和2）		伊勢佐木町ビルディング（通称イセビル）竣工（現存） 野澤屋呉服店 旧館跡にビルを新築	区制施行
1928（昭和3）	4月 桜木町に横浜学院開設 12月 横浜学院 境之谷へ移転	9月 南西部の三町が伊勢佐木町三丁目から七丁目に改称 野澤屋・松屋、横浜駅との間に無料送迎バス運行開始	10月 横浜駅 現在地へ移転開業 12月 横浜市電六角橋線が全通
1929（昭和4）	3月 横浜専門学校設立認可		
1930（昭和5）	5月 神奈川区六角橋へ移転 8月 初代配属校長着任	10月 吉田橋の鶴屋跡に松屋横浜支店開業（地上7階、地下1階）	3月 山下公園開園
1931（昭和6）	3月 第二部第1回卒業式	4月 森永キャンデーストア新築落成 5月 震災後仮営業だった越前屋呉服店、新店舗落成	6月 満州事変
1932（昭和7）	3月 第一部第1回卒業式 5月 創立記念仮装行列、途上で中止		3月 東横線全線開通 5月 5.15事件
1933（昭和8）	5月 創立五周年記念祭 12月 初めての給費生試験実施	8月 越前屋呉服店閉店（のちに松屋西館、現 エクセル伊勢佐木）	3月 国際連盟脱退
1934（昭和9）	5月 第1回対丫専野球定期戦開催		6月 文部省思想局設置
1935（昭和10）	4月 制帽を角帽から丸帽へ改定	7月 入口に金属製アーチ設置	3月 復興記念横浜大博覧会開催
1936（昭和11）	1月 陸上競技部 東京箱根駅伝初参加	4月 オデオン座新築	2月 2.26事件 11月 日独防共協定調印
1937（昭和12）	3月 横専同窓会創立総会開催 12月 「南京陥落祝賀行進」、横浜の専門学校五校（五専門）が伊勢佐木町などを行進		7月 日中戦争勃発
1938（昭和13）	5月 宮面ヶ丘にグラウンド新装 12月 『商経法論叢』創刊	2月 震災後バラック営業だった不二家伊勢佐木町店 新築開店（現存）	4月 国家総動員法公布
1939（昭和14）	4月 工学三科（機械・電気・工業経営）新設 7月 野球部 全国高等学校野球大会で優勝		4月 横浜－パオ定期航路ひらく 9月 第二次世界大戦勃発
1940（昭和15）	3月 本館校舎改築 10月 機械工場（工科実験実習工場）完成		9月 日独伊三国同盟成立 12月 東京湾開港反対市民大会 同 神奈川県文化興隆連盟結成
1941（昭和16）	2月 横浜専門学校報国団結成 12月 繰上卒業式（翌年以降9月に繰上卒業）		12月 太平洋戦争勃発
1942（昭和17）	2月 「シンガポール陥落記念五専門学校学生大会」で伊勢佐木町などを行進	12月 金属回収令により入口アーチ供出	2月 シンガポール占領 4月 磯子区に空襲 6月 ミッドウェー海戦
1943（昭和18）	4月 創立15周年記念式典挙行 11月 出陣学徒壮行会		10月 「在学徴集延期臨時特例」公布、学生・生徒の徴集猶予停止 12月 第一回学徒兵入隊（学徒出陣）
1944（昭和19）	4月 高等商業科を経済科、貿易科を東亜科に改称	決戦非常措置により営業停止が相次ぐ	1月 「緊急学徒動労員方策要綱」閣議決定 8月 学徒動労令公布
1945（昭和20）	4月 空襲により校舎の一部焼失 9月 占領軍により校舎接収、12月解除	8月 松屋、オデオン座、不二家ほか占領軍により建物接収	5月 横浜大空襲 8月 終戦、占領軍進駐
1949（昭和24）	4月 新制大学に昇格、「神奈川大学」として第一回入学式		3月 野毛・反町で日本貿易博覧会開催
1953（昭和28）	3月 校章改正	米軍のメイン・ストアになっていた野澤屋（松屋横浜支店）、全面的に接収解除	2月 NHKテレビ本放送開始 6月 第一回みなと祭開催
1955（昭和30）		米軍の娯楽施設になっていたオデオン座、接収解除	
1958（昭和33）	4月 新図書館開館（現6号館）	米軍の将校クラブになっていた不二家、接収解除	5月 開港百年祭開催
1959（昭和34）	4月 応用化学科・第二工学部新設 11月 創立三十周年記念式典挙行		10月 横浜駅西口に高島屋開店 9月 横浜市庁舎落成
1962（昭和37）	11月 創立記念大学祭前夜祭で伊勢佐木町を仮装行列		
1964（昭和39）		オリンピックの聖火ランナーを迎えるため、入口に「ウェルカムゲート」を設置	5月 国鉄根岸線、桜木一磯子間通 10月 東京オリンピック開催 12月 横浜駅西口ダイヤモンド地下街開店
1972（昭和47）			3月 横浜市電全廃
1978（昭和53）	9月 創立50周年記念式典挙行	11月 二丁目目だがモール化される	4月 横浜スタジアム開設 5月 新東京国際空港（成田）開港

『神奈川大学70年のあゆみ』、『ときめきのイセザキ140年』（横浜開港資料館）、「横浜市史」、各社HPをもとに作成

番号	展示タイトル	年代	作成者・出典等
①展示室内ケース展示			
1	『横浜案内』	1936（昭和11）年頃	（不明）
2	『映画展望』創刊号	1936（昭和11）年6月	横浜専門学校映画研究会
3	花月プログラム 第18号	1937（昭和12）年4月	伊勢佐木町二丁目40 花月
4	『ODEON-ZA WEEKLY』No.621、No.687	1936（昭和11）年11月、 1938（昭和13）年2月	オデオン座
5	『新広告研究』第2号	1938（昭和13）年1月	横浜専門学校広告研究会
6	昭和10年ごろの伊勢佐木町店舗図（『とうよこ沿線“樞” No.31』）	1985（昭和60）年12月	東横沿線を語る会
7	「横専ボーイズ「ザキあれやこれや 青い鳥の三ヶ年」（パネル）	1941（昭和16）年か	1941（昭和16）年12月卒業アルバム
8	「日の丸のザキへ今日も又」（パネル）	1942（昭和17）年か	1942（昭和17）年貿易科卒業アルバム
9	「横専法科生二眼」（パネル）	1942（昭和17）年前後	1943（昭和18）年9月法学科卒業アルバム
10	マッチラベルスクラップ	1937（昭和12）年～ 1940（昭和15）年	1940（昭和15）年貿易科卒 竹本豊秋氏
11	歌崎治美発森島輝雄宛書簡	1941（昭和16）年12月	1941（昭和16）年貿易科卒 歌崎治美氏
12	松屋横浜支店 通勤証明書（杉田一日の出町間）	1958（昭和33）年12月	松屋横浜支店 人事課長
13	松屋横浜支店 身分証明書（松屋横浜支店）	1958（昭和33）年12月	松屋横浜支店 人事課長
14	松屋横浜店 昭和35年中元期アルバイト依頼葉書	1960（昭和35）年夏	松屋横浜店
15	松屋横浜店 昭和36年秋臨時アルバイト依頼葉書	1961（昭和36）年秋	松屋横浜店 人事課
16	松屋横浜店内 室内装飾品売場写真	1958（昭和33）年12月	（柏倉幸男氏）
17	松屋横浜店内 ハンカチーフ 靴下売場写真	1958（昭和33）年12月	（柏倉幸男氏）
18	松屋横浜店内 婦人服売場写真	1958（昭和33）年12月	（柏倉幸男氏）
19	松屋横浜店内 ベビー家具売場写真	1958（昭和33）年12月	（柏倉幸男氏）
20	松屋横浜店内 事務室（カ）写真	1958（昭和33）年12月	（柏倉幸男氏）
21	松屋横浜店 実習生バッジ	1958（昭和33）年4月	松屋横浜店
22	松屋横浜店 大入袋	1958（昭和33）年12月	松屋横浜店 計算課
23	松屋横浜店 給料袋	1962（昭和37）年3月	松屋横浜支店
②吹抜側面 パネル展示			
24	吉田橋から見た伊勢佐木町	1931（昭和6）年か	1932（昭和7）年高等商業科卒業アルバム
25	吉田橋を渡って伊勢佐木町へ入る応援団	1941（昭和16）年5月か	（個人所蔵写真より）
26	伊勢佐木町を行進する応援団	1937（昭和12）年5月か	1938（昭和13）年高等商業科卒業アルバム
27	横専祭 伊勢佐木町の雑踏	1933（昭和8）年5月か	『神奈川大学70年のあゆみ』15頁
28	家族連れと学生たち	1937（昭和12）年頃	1938（昭和13）年3月卒業貿易科アルバム
29	松屋行きの送迎バスに乗る学生たち	1937（昭和12）年冬	1938（昭和13）年卒業アルバム
30	「シンガポール陥落記念」	1942（昭和17）年	1942（昭和17）年貿易科卒業アルバム
31	不二家での独逸語班学徒出陣壮行会	1943（昭和18）年10月	（個人所蔵写真より）
32	接収下の伊勢佐木町	1951（昭和26）年か	1952（昭和27）年卒業アルバム
33	大学祭前夜祭のパレード	1965（昭和40）年11月か	1966（昭和41）年卒業アルバム



図1 松屋の送迎バスに乗る学生たち（展示番号29）1937（昭和12）年



図2 不二家での独逸語班学徒出陣壮行会 1943（昭和18）年10月
最前列中央は草薙正夫教授、その左は長尾憲忠教授。



(上) 図3 伊勢佐木町を後進する応援団
(展示番号26) 1937年5月か

横浜公園での野球大会（対 Y 戦）の優勝行進。画面左上は増築中の野澤屋。右上はサクラサロンの看板で、その下方に「〔不二〕屋洋菓子店ビルディング新築工事 アントニンレモンド建築事務所」の看板がある。

(下) 図4 「シンガポール陥落記念」(展示番号30) 1942年

1942（昭和17）年2月15日、当時難攻不落とされたシンガポール要塞を日本軍が占領した。これを記念して横浜の専門学校五校（「五専門」）による県庁前、横浜公園、伊勢佐木町、伊勢山皇大神宮などの行進と大会がおこなわれた。



註

- (1) なお、会期終了後もこの壁面のパネル展示部分は「ザキ」をめぐる記録と記憶」として継続中である（二〇一七年一月現在）。
- (2) 一九三四（昭和九）年の早い時期に閉店。店舗を松屋が購入し、同年七月に寿百貨店として開業した。
- (3) 町名としてはオデラン座は現在の長者町六丁目に位置したが、「ザキ」を象徴する店舗のひとつであった。
- (4) 関東大震災前には寄席が多数あったが震災後は激減した。花月も戦後は映画館となり、のち（閉館年不明）、跡地に横浜東映会館が開館したが二〇〇六（平成十八）年に閉館した。
- (5) 横浜専門学校が六角橋に移転する二年前の一九二八（昭和三）年に横浜市電六角橋線が全通している。
- (6) このほかに一つ先の尾上町交差点からのルートや、オデオン座近く長者町五丁目を利用した可能性も考えられるが、正確な利用系統や所要時間については現時点ではつきりしない。なお、国鉄（現 J R）根岸線の関内駅開業は一九六四（昭和三十九）年、市営地下鉄関内駅および伊勢佐木長者町の開業は一九七六（昭和五十）年のことである。
- (7) 上羽勝夫「横専の思い出」『宮陵』第二十九号、一九八〇年三月
- (8) 『横専学報』掲載広告による。このほか学生新聞掲載の広告については、本紀要別稿「学生新聞掲載広告における近隣商店等一覧」を参照されたい。
- (9) 寄贈者によるスクラップブックへの書き込みによる。
- (10) 関内の横浜公園内、現在の横浜スタジアムの位置にあった球場。一九二九（昭和四）年、関東大震災復興事業の一環として竣工。
- (11) 参考文献 2、26 頁
- (12) 参考文献 7 ほか
- (13) 不二屋は「森キャン」こと「森永キャンデーストア」や「オリンピック」と並んで、横専生がザキでのクラス会などでよく使う飲食店だったようである（参考文献 1、註 7）。
- (14) 卒業の同月、一九四一（昭和十六）十二月に臨時徴兵検査が実施され、合格者は翌年二月に入隊となった。
- (15) 参考文献 4、44 頁
- (16) 柏倉氏からの聞き取りによる。
- (17) 「前夜祭パレード 三十年ぶりの伊勢佐木町進出―六角橋を提燈行列―」『宮陵会報』第六号、一九六三年一月